

# 最新事情

京都医療科学大学キャンパス。京都駅から快速電車で40分。学びに集中できる環境が整っている



ビジネス文書の学習を入り口に  
社会に出て働くための意識を養う

## 京都医療科学大学

(京都府南丹市)

京都医療科学大学は、1927年に島津製作所によって設立された国内初の診療工ックス線技師の養成校「島津レントゲン技術講習所」を起源とする、診療放射線技師の養成機関である。日々、専門技術について学ぶ学生たちだが、「日本語の文章表現について深く知るのが楽しい」とビジネス文書検定の学習に熱心に取り組んでいるという。同学のビジネス文書検定への取り組みと、就職支援について伺った。

### 専門からかけ離れた分野の学びが 楽しみと刺激に

京都医療科学大学は、医療科学部放射線技術学科、1学年約90人の単科大学である。4年間で学ぶ科目のほとんどが人体構造や医学、診療画像技術や放射線技術に関する理系の科目であり、臨床実習や診療放射線技師の国家試験に向けて、習得しなければならない知識や技術は多岐にわたる。

そのような学生生活の中で、同学では3年前からビジネス文書検定3級・2級に取り組んできた。2022年度、2023年度の2年連続で文部科学大臣賞(団体)を受賞する好成績だ。



講師の青野美幸先生(右)と学生支援センターの小山博センター長。小山センター長は島津製作所勤務の経験を生かし、現場で活躍できる学生の育成に力を入れている

1年前期の必修科目「初年次に学ぶ大学のスタディ・スキルズ」で、あらゆる学問の基礎になる日本語の文章表現について指導するのが講師の青野美幸先生だ。テキストとしてビジネス文書検定3級の実問題集を指定しているが、授業で問題を解かせるわけではなく、基本は6月の検定試験に向けての自習。

「文書作成について話す回で疑問点を挙げてもらうのですが、学生は試験に出るかどうかにかかわらず、興味を持ったことを聞いてくれます。時候のあいさつの成り立ちや封筒の宛名書きなど、詳しく知りたいと声があった部分について解説をしています」(青野先生)。

受験対策は課外で、3級と2級の対策講座や模擬試験を数回ずつ実施している。回数や内容はまだまだ試行錯誤だと言うが、学生から「ぜひ模擬試験をやってほしい」と要望があり、実施回数は増えているそうだ。

(左から)3年生の西原陽祐さん、森本凜香さん、2年生の大味奈夕夏さん。全員、ビジネス文書検定3級・2級に合格。「専門以外の勉強だから楽しい!」と笑顔。皆で問題を出し合ったり覚え方を披露し合ったりして取り組んでいるという



ビジネス文書検定を取り入れたきっかけは、非常勤で出向いた他大学で同検定の指導をしたとき、学生たちが通常科目とは違う内容を楽しんで学んでいる様子を感じたからだだった。

「友達とのやりとりとは違う『大人の文章を書く』ことで社会人に一歩近づいた感じがするのでしょう。本学は理系の大学で、医学や放射線に関する専門的な知識と技術の指導に力を入れていますが、その中にビジネス文書検定を持ち込むことは学生たちには気分転換になるかもしれない、面白がって勉強してくれるのではないかとという期待がありました」(青野先生)。

その予想は見事に当たった。専門とは別の分野だからか、進捗を競うのではなく「一緒に楽しんで取り組む勉強」になり、学生同士の絆も深まった。

導入当初は3級だけのつもりだった青野先生だが「11月にも試験があるようだし2級もぜひ受けたいと、学生から言ってきたのです」と振り返る。2023年度以降は2級・3級を併願受験する学生も増えている。

「特に今年度は76人が併願受験。診療放射線技師の国家試験は午前

2時間半、午後2時間半の計5時間なのですが、ビジネス文書検定は前半が3級2時間10分、後半が2級2時間20分で、ちょうど同じくらいなのです。これを集中して受けられたら、国家試験の受験に向けての自信になるといって非常にしつかりした理由でした」(青野先生)。

## 大人としての表現の仕方を 知ることが面白い

3年生の森本凜香さん、西原陽祐さんは、1年生の6月にビジネス文書検定3級に合格。その後、森本さんは2年生、西原さんは3年生になってから2級にも合格した。青野先生がビジネス文書検定を導入した初年度の学生だ。

森本さんは「言い回しは一つだけでなく、同じことを言うのにも幾つかバリエーションがあることを知り、先生に質問に行きました。社外文書を書く練習では、応援しているアーティストの所属事務所の社長を受信者にして、文書を作成しました。これは、きちんと書かなければと緊張感も出てよい方法でした」と勉強法を教えてくれた。

「就職してからも、ただ単に検査のための画像撮影をするだけではなく、医師や看護師など他の職種の方と連携して仕事をするようになると思います。その中で文章を書くことも多いと思うのですが、正確に、簡潔に、伝わりやすいように書く力は大事です。そのために、今勉強してよかったと思います」(森本さん)。

西原さんは「日本語には同じ読み方の漢字がたくさんありますが、それぞれの意味をしっかりと理解することで使い分けができるようになります。2級の勉強をしていて、特にそれを実感しました」と話す。

「ビジネス文書に触れたのは入学直後、自分が大人になることも実感できていない時期。社会人の世界に足を一歩踏み入れた気がして、学びに向かう意識ができたように思います。こんなところまでサポートしてもらえるなんてありがたいと思いました。パンフレットを見て秘書検定にも興味が出てきたところ。今のうちに一般常識やコミュニケーションの取り方などについて学んでおきたいです」(西原さん)。

2年生の大味奈夕夏さんは、1年生の6月に2級・3級を併願受験して合格した。

「3級は参考例があるから一見解きやすいのですが、細部を見てもねえなければならぬという点で難しさもありました。2級は参考例がない分、自由度が上がる感じ。型や書き方が3級でしたっけ学んで2級で確認しながら解くことで理解が深まりました」と併願受験のメリットを語る。

「検定で学んだことで先生方へのメールも書きやすくなりました。卒業後、仕事に就いてからも、目上の方にメールを書くとき役に立つと思います。卒業までに忘れないようにしっかりと復習したいです」(大味さん)。

青野先生が学生の変化を感じるのには、ノート





昨年度から、島津製作所でのインターンシップも開始した



青野先生が指導する小論文講座

の取り方を見たときだ。

「ポイントをつかみ、分かりやすく丁寧に、正確に書く、相手に正しく伝わるようにといった、文章の組み立て方の基本が理解できているようです。見出しを付けたり色を変えたりもしている。

確実にビジネス文書検定のおかげだと思っています。学生は4年間でさまざまな専門的な資格に挑戦することになりますが、ビジネス文書検定は一番最初に受ける資格試験。学べば分かる、ポイントをつかめばできるということを実感して、ぜひ弾みにしてほしいです」(青野先生)。

### 自分に合った職場で働くための意識づくりを目指す

学生支援センターの小山博センター長は、同学のキャリア支援の目標は「どういう形で卒業していつもらえるか」という形です。

「私は以前は島津製作所で医療機器の設計開発やマーケティングなどを行っていたのですが、製品を世に出すのと似ています。最終段階

で問題が起こるようでは駄目なので、設計やマーケティングの段階から先を見越しておく。学生も4年生になってから慌てるようではいけません。そのため、初年次から積み重ねていけるキャリア支援のプログラムを作ることにしたのです」(小山センター長)。

内容は、コミュニケーションや小論文など多岐にわたる。青野先生も、1年次前期から履歴書の書き方や小論文講座を指導。2年次になると、自分自身を知り、外部の人の話を聞く「イメージアップ講座」「人間力講座」などもあり、さまざまな方向から自己分析をさせるといいます。昨年度から、島津製作所でのエンジニアとしてのインターンシップも始めた。

「医療系大学で一般企業でのインターンシップはあまりないと思います。どのような仕事ぶりなのか、医療機関とは違う職場を意識してもらうことが目的です。また本学では島津製作所の社員の方に講師として来ていただき、同社の工場見学も行っています。医療機器の作り手の視点も大事に学んでもらいたいです。本学の卒業生は日々の業務でもそのような視点を持った上で医療機器を扱うので、作り手の新たな発想につながる意見を出し、日本の医療機器の進歩、改良に貢献しています」(小山センター長)。

青野先生は「小山さんは企業にいたからこそ『何年生のこの時期にはこれではきていけないといけない』ということを明確にしたプログラムを組んでくださっています」と信頼を口にする。

この数年は、キャリア支援講座のプログラムは全て小山センター長が企画しており、特別なものは学内の教職員で指導を担当する。内容も固定ではなく学年ごとに調整している。

「学生には、1年次からできるだけいろんなことを経験してほしいと伝えていきます。国家試験が目標なので、学年が上がるとなかなか時間はないようですが、私の願いは、卒業後も楽しく働き続けてもらうこと。だからこそ自分に合った職場に進んでもらいたい。就職先は病院だけでもありません。それを知ってもらうためにも島津製作所でのインターンシップは有効だと思います。知識や技術を生かした企画や設計、営業もできるはず。違う世界を知ることが大切ですね。関心が出たのなら、そちらにも後押ししたい。私はそれをサポートする一人だと思っています」(小山センター長)。



キャリア支援講座の一環で化粧品メーカーから講師を招き、男子学生には「スキンケア講座」、女子学生には「メイクアップ講座」を開講。自分を知る手掛かりの一つに

